



時計人インタビュー④

Christian Etienne

クリスチャン・エティエンヌ

[独立時計師]

15年の時を経て完成に近づく 宇宙の法則を封じ込めた 究極の天体時計

Photo: Ryoichi Yamashita

Interviewer: Masaharu Nabata

シ

ンガポールで2007年9月に開催された時計展示会「テンパス」において世界初披露されたリシャール・ミルの天文時計「プラネタリウム・テルリウム」。それが今年2月、日本に持ち込まれ、「リシャール・ミルGINZA」に展示された。

「このプロジェクトがスタートしたのは15年前。それは薄れたクロックへの興味を復活させるためであり、それには魅力的な製品が必要です。企画したのはグルーベル・フォーシーのふたり。彼らが設計しプロトタイプを作りました。そして、これを見たリシャール・ミル氏が資金提供を申し出たのです。私の参加は、その後。グルーベル・フォーシーに依頼されて製作を手掛けることになったのです。でも頼まれたときは悩みました。何日も寝ないで考え、答を出

すのに3日かかったのです」

こう説明するのは、製作担当の独立時計師クリスチャン・エティエンヌ氏。あのグルーベル・フォーシーが白羽の矢を立てただけあって、その腕は確かだ。

「15年のうち、最初の3年が設計。その後の7年がプロトタイプ製造と組み立て。私が入りかかったのは4年半前で、改良と調整を施しました。なにしろプロトタイプはメカニズムのみ。その後、天体を作って取り付け、外装も施しました。しかし、まだ最終的には仕上がっていないのです」

その言葉どおり彼によって新規製作された部分も少なくない。そのひとつが天体だ。「天体は当初、エナメルでしたが美しくないので使用を止め、文字盤と同じ塗料で彩色しました。太陽はYG、水星がRG、金星は青い天然石、地球はシルバー、月はいぶし銀でクレーターは実際の月と同じで、これ自体が自転して月齢を表示します」

こうして一応の完成を見た「プラネタリウム・テルリウム」だが、実は作業はまだこ

れからが山場だという。

「シンガポールの展示後にも各部を改良しました。12星座は古典的意匠でしたが、ミルさんの趣味に合わせてモダンに改修。またシンガポールでは、前面のプレートに隠れていたメカニズムを、表示を新しくして窓を開け、どこからでも見えるようにしました。さらに前後のアーチはアルミからチタンに変えます。なぜ最初からチタンでなかったかといえば曲げるのが難しいから。そこで同じ形状のものをチタンの削り出しで製作中です。しかし、これだけの大きさのチタン・ブロックを見つけるのが難しく、素材探しと加工に時間が取られます。同じことが他の部品でも起きたため4年半もかかりました。しかも日本で展示の後、世界を回ってスイスに戻るのは年末。そうしたら一度、全部分解して組み込みと調整しますが、これだけで4カ月かかります」

いやはやなんとも遠大な計画。ちなみにこの時計、年内までに完成させ、その後、オークションに出品される予定とか。果たしてこの超絶的タイムピースにいくらもの値が付くのか？ 心して見届けたい。

1965年生まれ。外科医のような風貌だが、スイス・ポレントリーの工房は、その名も「A La Clinique Horlogere(時計の病院)」。複雑時計の開発や組み立て、ミュージアム・ピースの修復までを請け負う腕利き時計師。なお氏の工房レポートは本誌次号にて紹介

プラネタリウム・テルリウム 価格未定 天体運行表示と永久カレンダーを装備する超絶の天文時計。表示機能は、時刻、夏・冬時間、24のタイムゾーン、永久カレンダー(月・日・曜日、西暦の下2桁、閏年)、均時差、春分・夏至・秋分・冬至、星座、パワーリザーブ。部品総数1400個、ネジ550本、総重量44kg。ケースはチタン。東邦時計 ☎03-5807-8162

